

第10回日本赤十字看護学会学術集会

第10回日本赤十字看護学会学術集会報告

10th Conference of the Japanese Red Cross Society of
Nursing Science Reports

守田美奈子 Minako Morita

(日本赤十字看護大学)

平成21年6月20日(土)、21日(日)の2日間にわたり「語ろう 看護の夢」というテーマで第10回日本赤十字看護学会学術集会を無事開催することができた。この場をお借りして、ご参会頂いた会員の方々そして学会運営にご協力頂いた関係者の皆様方に御礼を申し上げたい。

I. 学術集会の開催に際して

今回は学会発足10周年という記念すべき年の学会であり、記念式典と合わせての開催となった。本学会は、樋口康子理事長のもと2000年に「21世紀の赤十字の看護」というテーマによる学術集会でスタートをきった。そこからの会員数の伸びは著しく、すぐに千人を超えたという記憶がある。改めて赤十字の規模のすごさと絆の強さを痛感したことを、赤十字看護大学の旧校舎の講堂で行われた学会での場面とともに、懐かしく思い出す。それ以降、全国各地で学術集会が開催され、10年後に新しく生まれ変わった日本赤十字看護大学で再び学術集会が開催されることになった。開催が決まったときには、偶然とはいえ10年という節目の年に担当させて頂けることに感慨を覚えた。

今回はこれまでの学会活動を振り返りつつ、次の時代に向けて新たな赤十字看護学会の展望が持てるよう、また看護師それぞれが看護への夢を抱き続け、それを語り続けられるような未来に向かいたいという思いを込めて「語ろう 看護の夢」というメインテーマにした。10周年記念式典とシンポジウムも、学術集会に合わせて開催することが決まり、企画委員・実行委員一同さまざまなプログラムを検討し1年間にわたり準備を行ってきた。

II. 学会プログラムと運営

特別講演は大阪大学学長、鷲田清一先生から「ホス

ピタリティという思想」でご講演を頂いた。学長としても研究者としても多忙な日々をお過ごしの方に講演依頼を行ったときには本当に恐縮した気持ちでいっぱいだったので、すぐに快くお引き受け頂いた時には本当にほっとした。そのときの先生の言葉にはすでに「ホスピタリティ」の気持ちが満ちていた。講演内容も格調の高さと同時にユーモアもあふれており、先生のお人柄がにじみ出るようなお話に心打たれた。参加者からは、「異なる視点で、はっとしておもしろかった」、「ホスピタリティの本質と看護の本質について考えさせられる講演であった」というような感想が寄せられ、ケアと同様に大切な「ホスピタリティ」という言葉の意味が心に残った講演であった。

赤十字看護大学の学部長、川嶋みどり先生からは「赤十字における看護の智と技」のテーマで教育講演をして頂いた。赤十字に蓄積した看護の智や技を言語化して伝えていくことの大切さを強く思われる内容で身が引き締まる思いがした。参加者からも「赤十字の看護の中心となるものを今一度心にとどめる機会となった」、「日赤の歴史を感じた。今後の発展が大事と思った」、「他の学会では聞けない内容だった」等、多くの感想が寄せられた。

シンポジウムは「看護の夢を支える」というテーマで、それぞれの現場でのユニークな取り組みが紹介された。新卒看護師を対象としたピア・グループの運営を行っている取り組み、抑うつ、認知症、せん妄の3つの英語の頭文字をとって3Dと称し、その問題に悩む看護師への支援を行っているという取り組み、そして看護部が存在しない病院でのマトリックス組織によるチームでのリハビリテーションへの取り組みなどであった。新人看護師の支援や認知症、せん妄への対応、そしてリハビリテーションのあり方など、どれも現場では対応が難しく頭を抱え込むような深刻な問題ばかりである。それらに対し、「あっ、そんな考え方や方法もあったのか」と思わせてもらうような新しい発想

による斬新的な取り組みが報告された。新しい試みを実践的に行うことの大変さは想像しつつも、それ以上に現場を変えていくときのおもしろさや楽しさも感じられ、シンポジウムを聞きながら看護っていいなあ、とつくづく感じた。会場の皆様からも「一人一人の意見がおもしろく、看護っていいなと思えた」、「これからの励みになった。明日からまたがんばろうと思えた」といった感想がアンケートに寄せられた。企画委員会では、看護を語りあうことで元気になったと思って頂けるような学会にしたいと話していたので、このようなご意見をうれしく読ませて頂いた。

今回はシンポジウムに加えテーマ・セッションを3つ企画した。「助産師の自律と協働」、「看護の専門性を臨床現場でいかに発揮するか」、「社会が求める看護の役割拡大－救急認定看護師の活動から－」というテーマである。最近では医師不足の問題と絡み合う形で看護の役割拡大に関する議論が盛んである。薬物の処方権などを有するナースプラクティショナーの教育の試みもすでに行われている。今回のテーマ・セッションの企画は、このような今日的な課題について、学会でも議論の場を設けようという意図でそれぞれの専門分野の先生方が企画されたものである。看護の専門性をどのようにとらえ、今後どのような方向にむかって実践や教育活動を展開していけばよいか各会場では議論が盛り上がった。

11月15日付けの看護協会ニュースでは、専門看護師・認定看護師をはじめとした専門性の高い看護師の役割拡大について議論を進めてほしいと、久常会長らが長妻厚生労働大臣に要望された記事が掲載された。今後このことは引き続き検討していかなければならない課題であることを改めて思った。

学会演題は、会員の皆様のご協力を得て口演30題、示説51題、全部で81演題の発表があった。看護管理、看護教育、キャリア開発、臨床看護、がん看護、患者・看護者の感情といった群に加え、赤十字における教育、救急看護という赤十字らしい研究の群をもうけることもできた。また会員の自主企画である交流セッションも5つ運営された。そのうち3つは、赤十字看護学会の国際活動委員会、臨床実践開発事業委員会、災害活動委員会による企画であり、「プロセスレコードをどう読むか－看護学実習における対人学習の指導－」と「ITCを活用した赤十字大学看護技術教育」の2つは、会員の自主企画によるものであった。私自身は看護実践開発事業委員会の委員であるため「赤十字の技－伝えよう・未来に向けて－」のセッションに参加したが、会場には人があふれており、話題提供者の講演も非常に実践的かつ看護への情熱が強く感じられ、参加者とともに感動を味わった。看護実践家のモデルといえるような赤十字出身の先輩方、そして現場で若い看護師を教育している管理者のお話を伺いながら、このよう

な形で看護を伝えていく役割が学会にあることを改めて思った。話題提供者のお一人である村松静子氏が、在宅事業の草分けとして今年度のエイボン女性年度賞を受賞されたことを、ここで皆様にもお知らせしたい。他の交流セッションでも、多くの方が参加し熱気にあふれた議論が展開されたことを伝え聞いた。

Ⅲ. 学会への感想

学会に参加して新しい情報だけでなく看護へのエネルギーが得られるような、そんな学会を、と思って1年間準備してきたが、どのくらいの方々にご参加いただけたか内心とても心配していた。結果としては約540名の方にご参加頂いた。懇親会にも100名近い方に参加して頂き、たくさんの方にお出で頂いた。多くの交流が生まれ、その分刺激が多い学会になったのではないかと考えている。

残念ながらアンケートの回収率が非常に悪く、多くの方のご意見を伺うことができなかった。しかし、回収できた方や参加頂いた方の直接的なご意見を伺うと、その目的をかなり果たすことができたのではないかと考えている。学会テーマに関心が持てたと回答した方はほぼ100%であり、教育講演や、シンポジウムなど、それぞれ満足したと回答された方がほとんどであった。プログラムが多く口演と重なり聞けなかったことや、質問時間が不足していたこと、フロアからの活発な意見がもっとあればよかったなどの課題やご意見も頂いた。

今回の学会は記念式典に加え、シンポジウムや教育講演、特別講演に加えスウェーデン赤十字大学との共同研究報告などもありプログラムは多彩であった。そのためプログラムが重なり、聞きたいプログラムに参加できず残念だったという声も頂いた。逆に、いろいろとプログラムがあったことで、例えば記念式典のシンポジウムで議論されたことが、次のテーマでの議論に繋がる輪唱のような効果をもたらした看護の専門性や役割など今日的な課題を深く考えさせられ刺激的であったという感想も頂いた。

Ⅳ. 学術集会を終えて

学会の準備に取り掛かったときは、その役割の重さに大変緊張していた。しかし周囲の先生方に支えられ、いろいろと教わりながら準備を進めることができた。赤十字看護大学には、学術大会長として学会運営の経験のある先生方が多く、また本大学で学会が開催されることも多い。学長、学部長の全面的なバックアップのもと、経験豊かな先生方や職員の方々が一丸となってこの学会に取り組んで頂いたので、とてもスムーズにそして着実に準備をすることができた。そのような

支えがあったので、最初は緊張していたが時間が進み計画が具体的になるにつれ、学会当日のイメージができるようになり、準備を楽しむゆとりもできてきた。学会当日は、いろいろな方々のお話を伺うことができ興奮の2日間を過ごすことができた。今となっては、大変貴重な経験をさせていただいたと感謝している。

お世話になった学術集会の企画委員・実行委員の先生方、そして職員の方々に改めて感謝申し上げます。

参加者の皆様にとってはご不便や不快なことがあったかもしれません。この場をお借りしてお詫び致します。また10周年記念式典とシンポジウムそして学術集会がとても良い形で運営ができたのも、日本赤十字看護学会の元理事長の新道先生、各理事の先生方のご理解とご支援のおかげであります。最後に日本赤十字看護学会の会員の皆様のご活躍とさらなる学会の発展を祈念し御礼の言葉とさせていただきます。